

・ AERA

4.30-5.7合併特大号 (P 4 3)



社会

チャペルの扉が開く。純白のホイールの車いすに乗った花嫁が、バージンロードを父親に押されて車いすに進む。迎える新郎は花嫁と並んでいすに腰掛ける。前列には車いすの友人たち。誓約、指輪交換、署名……。牧師もひざまずいて二人と目線を交わす。

2月、東京、青山の結婚式場「アイビーホール」で初のバリアフリーウェディング模範結婚式が行われた。足の不自由な女性や、実際に結婚予定の男性と新郎新婦役を演じた。共催の「Dow Corporation」(以下dow)代表、才野美和さん(39)は言う。「結婚式が障がい者の結婚式に携わる経験は非常に少なく、大手老舗でも10年に2、3件程度、もしものことがあってはと断ることが多いのです」

新婦にバリアフリーを

スロープをつけるなどバリアフリーをうたう式場でも、配慮するのは参列者まで。新郎新婦の動線には段差があることが多く、dowは、慣れない式場や車いすユーザーをサポートする事業を展開している。

花嫁は白い車いすに乗って

私はバリアフリー婚

純白の車いすでバージンロードを進み、お色直しは深紅のドレス。障がいを持つ女性たちの夢をかなえる車いすドレスができた。チャペルで祝福を受ける日が待ち遠しい。

才野さんは、弟がとどき車いすを利用する以前働いていた結婚式場でも、やはり参列者の親族に車いすの人がいて、気になっていった。「せっかくおめかしをして参列しても、病院のような車いすでは



チャペルに飾られた花嫁の衣装は、12年4月撮影された。12年4月撮影された。12年4月撮影された。

は現実には引き戻されてしまう。しかし、国内外のメーカーに聞いても花嫁らしいフェミニンなデザインのない車いすは無数。それなら自分作ろうと、2009年末にdowを立ち上げた。「DOW」(ツェリチク)というカタリ語で「幸せ」の意と名づけた車いすは、純白で統一した。財婚式はスワロフスキーをちりばめた羽根のようなデザインだ。「健常者でもこの車いすなら式を挙げてみたい」と思えるものにした」と才野さん。模範式に続いて、お色直しの実演があった。やはり才野さんが開発した、座ったまま着脱できるウェディングドレスから、バリアフリーコンサート若木秋子さんのアドバンスで作られた、婚衣装「両我」の深紅のドレスへ。自身も車いすユーザーの若木さんは、2年前に結婚式を挙げたとき、式場よりもドレスに着替えたい。「車輪からつまづいてしまいうので、自分ですそを抱えながら移動していたことが一番の思い出です」と苦笑する。ふわとしたボリウム感がな

り、舞衣装のようなものがばり。一生二度のことを妥協しなくならなくて、ふつうのドレスを着ました。しかし下半身がさかばって、シルエツトも座り心地もよくなかった。自走式の車いすは車輪が邪魔でドレスが着られなかった。自分だけ介護用車いすを借りたが、自分で動けないため、披露宴で出席者のところへ満足にあいつにいわなかった。そんな経験から生まれたのが、美しいシルエツトを保ち、からまないドレス、上からの視線を意識し、大きめの帽子のオアションもつけた。健常者の女性も「このドレスを着るために車いすに乗りたい」と言う出来栄だ。「もともと車いすドレスを広めたい」と若木さんは意気込む。参加した車いすユーザーの伊東美和さん(27)は言う。「今日はじめて、車いすです式ができるようになった。バリアフリーウェディングが広まれば、もっとよいものを、という動きも出てくるでしょう。だから今日は、夢が現実になる扉を開いた」